

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第9集

かみ と だ ほん むら
上戸田本村遺跡Ⅳ

2004

戸田市遺跡調査会

は じ め に

戸田市遺跡調査会

戸田市は昭和63年に開業された埼京線の開通以来、共同住宅の建設など開発が盛んになり街の景観が著しく変化してまいりました。

本書は、このような都市開発の中で文化財の保護を目的として緊急に発掘調査された「上戸田本村遺跡」の記録です。

上戸田本村遺跡は、荒川の溢流によって形成された自然堤防上の南端にあり、鍛冶谷・新田口遺跡や南原遺跡とともに戸田市を代表する遺跡です。この遺跡地内には古くから「くまん塚」と称する古墳跡があることで知られており直刀二振りが出土しています。また、昭和53年には市史編纂事業の一環として発掘調査が実施されており、古墳時代の集落跡であることが確認されました。

この遺跡は今回の発掘調査で第4次を数えますが、発掘調査によって馬形埴輪が初めて出土し、今まで不明確であった古墳跡の存在を明らかにすることができました。現在の荒川下流域にあっては出土例が少なく人物埴輪を出土する南原遺跡とともに貴重な遺跡であると言えましょう。

本書を埋蔵文化財の保護と普及活用の資料として、また学術研究の基礎資料としてご利用いただければ幸いです。

最後になりますが、本発掘調査に対し多大なご理解とご協力を賜りました熊本百合子様、そして直接に発掘調査現場でご協力をいただきました参加者の皆様方に深く感謝を申し上げあいさついたします。

例 言

- 1 本書は、埼玉県戸田市本町3丁目1822番地（7番9号）他の共同住宅建設工事に伴って発掘調査された上戸田本村遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業及び整理作業は、共同住宅建設の事業者である熊木百合子氏（戸田市本町3-7-9）から、戸田市遺跡調査会が委託を受けて実施したものである。
- 3 発掘調査は、平成11年10月18日から12月7日にわたって行った。
- 4 発掘調査は別表に掲げた調査組織により実施した。
発掘担当者 小島清一（戸田市教育委員会 生涯学習課）
- 5 出土品の整理及び図版の作成は、発掘担当者の指導により、整理参加者全員で行った。
- 6 本書の作成にあたり編集、執筆、写真撮影は小島が行い、渡辺豊子、尾形美枝子、岡崎久子、加藤晴美の協力を得た。各遺構の図版及び基本土層は渡辺、尾形が作成した。
- 7 発掘調査から報告書を作成するまでの過程で、下記の方から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）

浅野晴樹 嘉規小夜子 塩野博 西田賢吉

藤波啓容 古澤立巳 山崎武若 松良一

戸田市立戸田東中学校 戸田市立郷土博物館 戸田市遺跡調査協力会

- 8 発掘調査及び整理参加者は、下記のとおりである。

上原 勇 岡崎久子 尾形美枝子 勝俣初江

加藤晴美 古賀礼子 湖山淳子 早乙女孝子

信濃節子 下川美奈子 荘由香 関徳太郎

高橋富美子 鳴瀬久美子 平吹久美子 広瀬幸子

本田五月 横山とり 渡辺豊子

目 次

はじめに	戸田市遺跡調査会
例 言	
凡 例	
1 発掘調査に至るまでの経過	1
2 発掘調査の経過	2
3 上戸田本村遺跡の立地と環境	3
4 上戸田本村遺跡の概観	5
5 遺構と出土遺物	8
(1) 住居跡と出土遺物	8
(2) 古墳跡と出土遺物	10
(3) 溝と出土遺物	18
(4) 土壇と出土遺物	24
(5) 堀と出土遺物	28
(6) その他の遺構と出土遺物	35
(7) グリッド出土の遺物	36
6 まとめ	37

挿 図 目 次

第1図	上戸田本村遺跡Ⅳ及び周辺の遺跡位置図	3
第2図	大正期の上戸田本村遺跡周辺の地形図	4
第3図	上戸田本村遺跡調査地位位置図	5
第4図	基本土層図	6
第5図	上戸田本村遺跡Ⅳ遺構配置図	7
第6図	第1号住居跡実測図	8
第7図	古墳跡実測図及び遺物出土位置図	10
第8図	古墳跡土層断面図	11
第9図	古墳跡遺物出土位置図	12
第10図	古墳跡出土遺物実測図(馬形埴輪)	13
第11図	古墳跡出土遺物実測図(人物埴輪)	14
第12図	古墳跡出土遺物実測図	15
第13図	第1号溝実測図	18
第14図	第1号溝出土遺物実測図	19
第15図	第2・3号溝実測図	20
第16図	第3号溝出土遺物実測図	21
第17図	第4号溝実測図	22
第18図	第4号溝出土遺物実測図	23
第19図	第1号土塼実測図及び遺物出土位置図	24
第20図	第1号土塼出土遺物実測図	25
第21図	第2号土塼実測図	26
第22図	第3・4号土塼実測図	27
第23図	第1号堀実測図	28
第24図	第1号堀出土遺物実測図	29
第25図	第2号堀実測図(1)	30
第26図	第2号堀実測図(2)	31
第27図	第2号堀出土遺物実測図	32
第28図	第3号堀実測図	33
第29図	ピット実測図	34
第30図	グリッド出土の遺物実測図	36

表 目 次

第1表	古墳跡出土遺物(1).....	16
第2表	古墳跡出土遺物(2).....	17
第3表	第1号溝出土遺物.....	19
第4表	第3号溝出土遺物.....	21
第5表	第4号溝出土遺物.....	23
第6表	第1号土壇出土遺物(1).....	25
第7表	第1号土壇出土遺物(2).....	26
第8表	第1号堀出土遺物.....	29
第9表	第2号堀出土遺物.....	32
第10表	ピット一覧表.....	35
第11表	グリッド出土の遺物.....	36

図 版 目 次

図版1	上戸田本村Ⅳの位置(1) 調査区域全景(2)	図版9	第1号堀(北から)(2) 第2号堀(南から)(1)
図版2	第1号住居跡(南から)(1) 古墳跡(東から)(2)	図版10	第2号堀(南から)(2) 第3号堀(南から)(1)
図版3	古墳跡土層断面(SPA)(1) 古墳跡埴輪片出土状態(2)		ピット群(2)
図版4	古墳跡埴輪片出土状態(1) 古墳跡埴輪片出土状態(2)	図版11	古墳跡出土遺物馬形埴輪(1)・(2)
図版5	古墳跡土器出土状態(1) 古墳跡調査風景(2)	図版12	古墳跡出土遺物人物埴輪(1)~(3)
図版6	第1・2・3号溝(西から)(1) 第4号溝(南から)(2)	図版13	古墳跡出土遺物埴輪片(1) 古墳跡出土遺物土器(2)・(3)
図版7	第1号土壇(北から)(1) 第1号土壇土器出土状態(2)	図版14	第1・3・4号溝出土遺物(1)~(3)
図版8	第2号土壇(西から)(1)	図版15	第1号土壇出土遺物(1)・(2) 第3号土壇出土遺物(3) 第1号堀出土遺物(4)
		図版16	第2号堀出土遺物(1) グリッド出土遺物(2)~(5)

発掘調査の組織

会 理	長 事 (会長代理)	戸 田 市 教 育 委 員 会 戸 田 市 教 育 委 員 会	教 育 長 教 育 部 長	伊 藤 良 一 前 田 一 男
理	事	戸 田 市 教 育 委 員 会 戸 田 市 文 化 財 保 護 委 員 会 戸 田 市 都 市 整 備 部 都 市 計 画 課 戸 田 市 都 市 整 備 部 市 街 地 開 発 課 戸 田 市 建 設 部 建 築 課 戸 田 市 教 育 委 員 会 生 涯 学 習 課	教 育 次 長 委 員 課 長 課 長 課 長 課 長	加 藤 正 行 中 村 信 市 村 眞 大 谷 茂 夫 本 飯 塚 茂 男
監	事	戸 田 市 社 会 教 育 委 員 会 戸 田 市 立 郷 土 博 物 館 戸 田 市 教 育 委 員 会 生 涯 学 習 課	委 員 長 館 長 課 長	秋 元 隆 志 石 川 日 出 男 塚 茂 景 男
事 務 局	長	戸 田 市 教 育 委 員 会 生 涯 学 習 課	課 長	飯 塚 景 一 徳
事	務 局	〃 生 涯 学 習 課	主 幹	當 田 茂 清
〃	〃	〃 生 涯 学 習 課	副 主 幹	和 田 清
〃	〃	〃 生 涯 学 習 課	学 芸 員	小 島 洋 一
〃	〃	〃 生 涯 学 習 課	主 事	木 橋 清
調 査 員	〃	〃 生 涯 学 習 課	学 芸 員	小 島 洋 一

凡 例

- 本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として遺構図版1/80・1/40、遺物図版1/4である。それ以外は、図に沿ったスケールを参照されたい。
- 遺構・遺物図中の焼上、炭化物等の表示は次のとおりである。

	焼 土		炭 化 物		土 器 の 赤 彩 部 分
	攪 乱				

- 土器観察表における胎土の記号は、下記のとおりでである。
A：石英 B：金雲母 C：斜長石 D：黒く光る石 E：赤色粒子
F：白色粒子 G：褐色粒子 H：砂粒子
- 土層中の水糸レベルは、すべて標高3.8mである。

1 発掘調査に至るまでの経過

平成11年7月、戸田市本町3丁目7番9号の熊本百合子氏（以下「事業者」という）から、戸田市南町1,822番地に共同住宅建設の開発行為に伴う事前協議が開発担当所管課になされた。

戸田市では、昭和63年の埼京線の開通により共同住宅等の開発が進み、開発担当所管課との各種の協議を実施して文化財保護と開発事業との調整を図っている。

上戸田本村遺跡は、古くから「くまん塚」と称する古墳跡が存在することが知られており、また昭和53年に市史編纂事業の一環として発掘調査が行われて以来、共同住宅建設に伴い平成5年に第2次調査、平成7年第3次調査が行われ古墳時代の集落跡が存在することが明らかになっている。

教育委員会では当該地が上戸田本村遺跡包蔵地内に位置するため、開発を行う際には遺跡の現状を確認するため、試掘調査を実施する旨の回答をした。

その後、数度にわたる協議を重ね、平成11年7月28日に試掘調査を実施した。結果、古墳時代の溝跡等から土器を確認。教育委員会では調査結果を踏まえ、その取り扱いについて事業者と協議を行った。現地における遺跡の保存については計画を変更することが困難であることから、事前に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

これをもって、事業者からは平成11年10月5日付で、文化財保護法第57条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘届が文化庁長官宛に提出された。発掘調査に際し、教育委員会と事業者で協議し、事業が緊急を要することを考慮し、戸田市遺跡調査会会長と事業者は平成11年10月14日に事業委託契約を締結した。発掘調査は、平成11年10月18日から開始することになった。

戸田市遺跡調査会からは、文化財保護法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官宛に提出された。

なお、埼玉県教育委員会教育長からは、平成11年10月28日付、教文第3-518号をもって発掘届を受理した旨の通知があった。

2 発掘調査の経過 一日誌抄一

上戸田本村遺跡第4次調査は、平成11年10月18日から12月7日までの約1ヶ月半で実施した。季節的には秋で調査には良い季節であったが、10月下旬から11月初めにかけて雨天の日が続き、表土掘削から遺構確認の作業において足踏みをするような時間となってしまった。

以下、調査経過が6期に区分できるので整理しながら経過を見てゆきたい。

(10月18日)

早朝より関係者が集まり、調査が速やかに進むよう調査方法の共通理解を図り、試掘調査の結果をもとにトレンチを3ヶ所設定して表土の掘削を行った。この時は、調査範囲の再確認に力を注ぎ、遺構の配置や地形の状況を把握することに留めた。事業者や工事関係者との協議の結果、本格的な発掘調査は10月26日から再開することになった。

(10月26日～11月4日)

10月26日、本格的な表土の掘削作業を再開する。27日から雨天の日が続き、作業の中断や水対策など足踏みをする時間を余儀なくされた。掘削にあたっては、試掘調査や10月18日の事前調査の結果をもとに遺構確認面である黄褐色土層まで慎重に行った。表土を取り除いてゆく過程で、溝状の遺構から人物植輪の腕にあたる部分を検出している。28日には、調査に必要な発掘調査用具・資材等を搬入した。また、29日から人力により表土の掘削を行っている。表土の掘削作業は、実質5日間を要した。

(11月5日～11月9日)

11月5日、表土の除去が済み基準点測量及びグリッドの設定を行った。また、調査区域内を南側から遺構確認作業を開始する。遺構確認面である黄褐色粘土層の精査を丹念に行った。とくに、溝状遺構については、表土の掘削作業において人物植輪の腕と思われる遺物が検出されており、古墳跡の周濠としての可能性が高く、遺構の規模を確認するためサブトレンチを設定しながら、各遺構との配置状況を掴んだ。この段階で明らかになった主な遺構は住居跡1軒、溝状遺構(古墳跡)1本、中世の堀跡3本等である。

(11月10日～11月30日)

11月10日から確認された各遺構の調査を開始する。第1住居跡から取りかかり、並行して溝状遺構の調査を進めた。溝状遺構は、覆土から遺物が多量に出土しており、遺物の取り上げについては分布図を作成し、出土品整理作業における遺物の接合関係が明確になるよう慎重に行った。他の遺構においても同様に主な出土遺物については、分布図を作成して遺物の取り上げを行った。

(11月30日～12月1日)

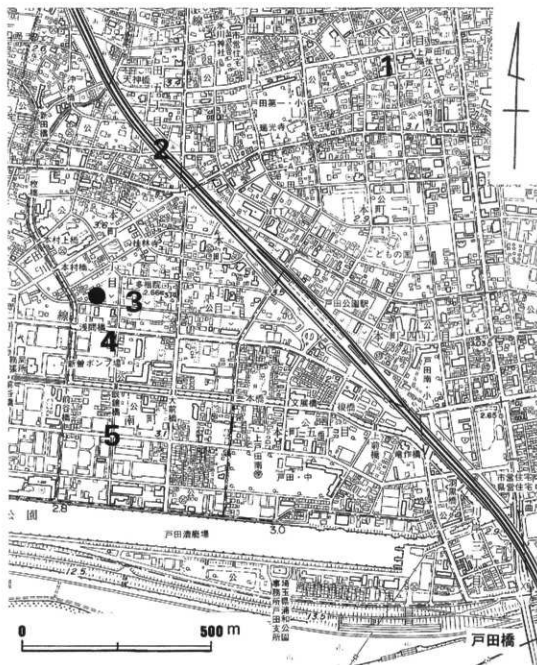
調査区域内における遺構の全容を写真に記録するため、11月30日から全員で清掃作業を行い、12月1日に全体の写真撮影を行った。

(12月3日～12月7日)

12月3日から6日まで検出された遺構の全体測量を行った。12月7日に予定された現地における全作業を終了し、約1ヶ月半を過ごしたプレハブ内の資材を撤収した。

調査日数25日、参加延べ人数282名であった。

3 上戸田本村遺跡の立地と環境



- | | | |
|--------|-------------|------------|
| 1 前谷遺跡 | 2 鍛冶谷・新田口遺跡 | 3 上戸田本村遺跡 |
| 4 南町遺跡 | 5 南原遺跡 | ● 上戸田本村遺跡Ⅳ |

第1図 上戸田本村遺跡Ⅳ及び周辺の遺跡位置図

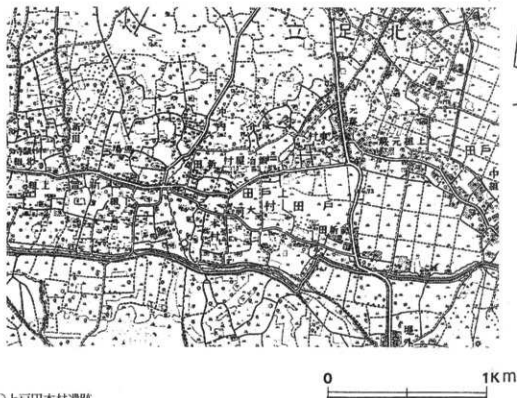
上戸田本村遺跡Ⅳ（第4次調査）の調査地は、戸田市本町3丁目1822番地他（7番9号）に位置している。JR埼京線の「戸田公園駅」より約500mのところにある。交通の利便性から共同住宅等の開発が盛んな地域となっている。

戸田市は埼玉県の南端に位置し、東は川口市、北は浦和・蕨両市、西から南は荒川を境とし朝霞・和光両市、そして東京都板橋区・北区と接している。面積は、18.17km²を測る。東には中山道が、西には国道17号バイパスが、中央には東北・上越新幹線及び埼京線が縦断して東京へと通じている。かつて、荒川には「戸田の渡し」があつて江戸への玄関口として交通の要衝となつていたところである。現在、荒川は西部では北西から南東へ流れ、笹目付近で東へと方向を変え、南部ではほぼ東西に流路をとっている。

こうした周辺地域の状況の下、埼玉県選定重要遺跡である鍛冶谷・新田口遺跡をはじめとする市内の遺跡群が分布する低平な微高地は、荒川（旧入間川）の溢流によって形成された火山灰質の黄褐色粘土層を基盤としている。標高は4～5mを測る。

戸田市内における主な遺跡は、市域の中央部に位置しており、第1図にも見られるように前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南原遺跡等が連なり、上戸田川に沿うように遺跡群を形成している。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓等を検出する集落跡である。

上戸田本村遺跡は、№3で、鍛冶谷・新田口遺跡の南側で自然堤防の中ほどに位置するものである。



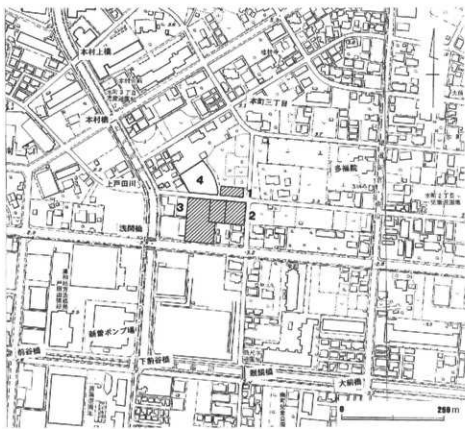
○上戸田本村遺跡

第2図 大正期の上戸田本村遺跡周辺の地形図

4 上戸田本村遺跡の概観

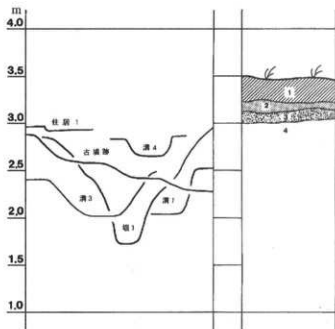
上戸田本村遺跡は、荒川(旧入間川)の溢流によって形成された自然堤防の中ほどにあり、鍛冶谷・新田口遺跡と同じ自然堤防上に立地している。古くから「くまん塚」と称する古墳跡や、昭和53年には市史編纂事業による第1次調査が行われ、古墳時代前期や後期の集落跡の存在が明らかになっている。

遺跡の位置するところは現在の戸田市本町にあたるが、もとは旧上戸田村に属している。江戸時代の末期に編纂された『新編武蔵風土記稿』の上戸田村の項を見ると、「上戸田村ハ群境荒川ノ岸ニアリ、江戸ヨリノ行程三里、戸田領十一カ村ノ本郷ナリ、古 上下戸田及び蔵、塚越の四村ヲ合セ戸田村ト唱ヘシト云、サレド正保ノ改ニ戴タレバ分村ノセシハ近世ノ事ニアラス・・・」と記されている⁽¹¹⁾。戸田領とは上戸田村、下戸田村、新曽村、上青木村、下青木村、里村、西新井宿村、前川村、蔵宿、塚越村の十一カ村から成っており、現在の戸田市、蕨市、川口市、鳩ヶ谷市、東京都北区にわたる範囲とされている。そして、同書の小名の項には上戸田村として「鍛冶屋 新田 本村 前新田 後谷 東村」の地名を見いだすことができる。また、第2図に取り上げた大正期の地形図には、当調査地は上戸田村の本村に位置している⁽¹²⁾。遺跡名称の「上戸田本村」は、この「上戸田」と「本村」を合わせたものである。



第3図 上戸田本村遺跡調査地位置図

古代における上戸田本村遺跡は、「くまん塚」と称する古墳跡や土師器の散布地として知られており、約3,000㎡が遺跡の範囲となる。「くまん塚」からは、横穴石室の石材の一部と直刀が二振りが残されている。二振りとも平造りの直刀で基部を欠失しているため刀身長は、計測できない状態であるが、現存の刀身長は二振りとも約60cm前後のものである。また、第一次調査においては古墳時代前期の住居跡が2軒と方形周溝墓が2基、古墳時代後期の住居跡が2軒検出されている^(註3)。第2次調査においては弥生時代後期後半の溝跡(環濠)1本と古墳時代前期の住居跡13軒が検出されている。そして、第3次調査においては、第2次調査で検出された溝跡(環濠)の続きや古墳時代前期の住居跡1軒、古墳時代後期の土器が廃棄された溝状遺構が1ヶ所検出されている。他に、第2・3次調査ともに中世の陶器を出土する堀跡が検出され、また南側に隣接する南町遺跡^(註4)からは宝篋印塔の相輪や板石塔婆の一部が出土しており寺院跡としてすぐに特定できるものではないが、その存在を関連づける成果を得たものである。



土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を一様に少量、炭化物を微量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 黒褐色土 黄褐色土粒子をまばらに少量含む。土器片あり。粘性、良。しまり、良。
3. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子をまばらに少量、灰褐色土粒子をまばらに少量、黒褐色土粒子を少量含む。鉄塊あり。粘性、しまり、良。
4. 黄褐色土 粘土質土層。基礎の層。粘性、良。しまり、良。

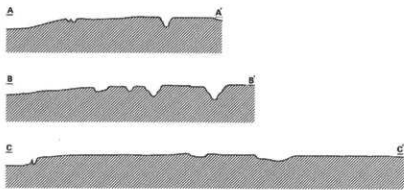
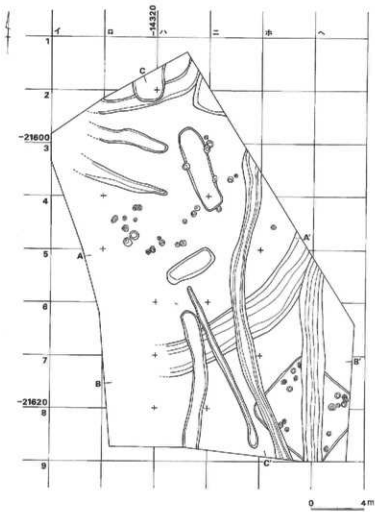
第4図 基本土層図

註1 『新編武蔵風土記稿』巻之一百四十一 足立郡之七 戸田領

註2 調査地については、現在の地図と照合して推定したもの

註3 『戸田市史 資料編1』戸田市1981

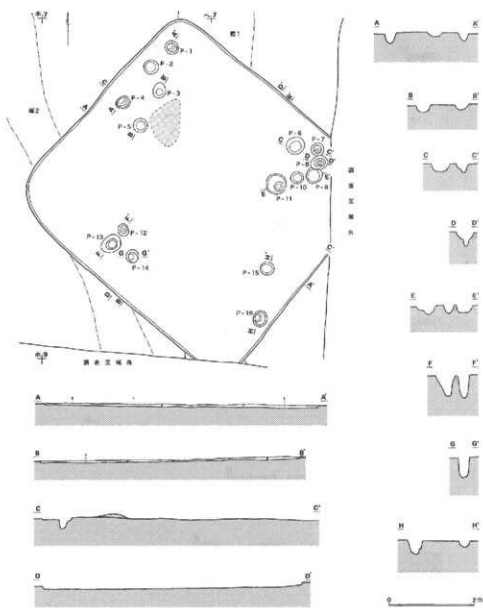
註4 塩野博『南町遺跡1』戸田市遺跡調査会報告書第1集 戸田市遺跡調査会1987



第5図 上戸田本村遺跡IV遺構配置図

5 遺構と出土遺物

(1) 住居跡と出土遺物



土層註

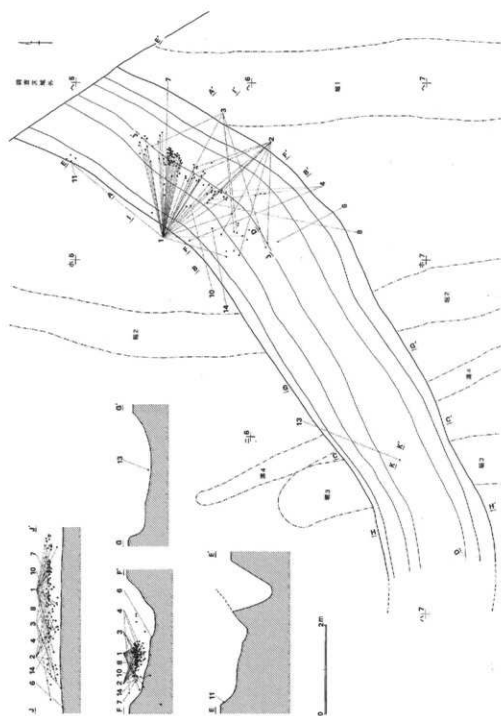
1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、焼土、炭化物を多量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、焼土、炭化物を少量含む。粘性、強。しまり、良。

第6図 第1号住居跡実測図

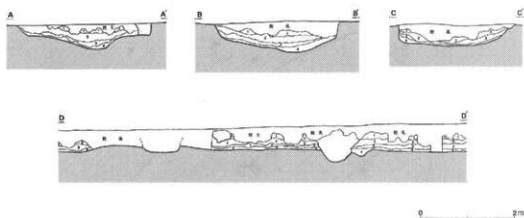
第1号住居跡(第6図)

調査区の南側ホ～ヘ7～8グリッドに位置する。第1・2号堀跡と切り合って構築され、東側コーナー部分は調査区域となる。新旧関係は、本跡の方が最も古い。検出された部分での規模は、長径6.6m、短径6.1m、推定面積40.26㎡を測り、隅が僅かに丸くなる隅丸方形プランとなる。軸偏差は南北軸がN-50°-Wをとる。床面は、遺構確認面から5cmほどの浅く平坦な掘り込みであった。ピットは、各コーナーごとにまとまって計16ヶ所検出された。P-1は長径33cm、短径32cm、床面からの深さ21cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。P-2は長径36cm、短径35cm、床面からの深さ10cmを測り、中型円形である。P-3は長径36cm、短径27cm、床面からの深さ14cmを測り、中型楕円形である。P-4は長径35cm、短径28cm、床面からの深さ25cmを測り、中型楕円形で底面に柱根状の掘り込みがある。P-5は長径35cm、短径35cm、床面からの深さ18cmを測り、中型円形である。P-6は長径43cm、短径38cm、床面からの深さ18cmを測り、大型不整形円形である。P-7は長径30cm、短径30cm、床面からの深さ21cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。P-8は長径42cm、短径32cm、床面からの深さ33cmを測り、大型楕円形で底面に柱根状の掘り込みがある。P-9は長径40cm、短径34cm、床面からの深さ18cmを測り、中型不整形円形である。P-10は長径28cm、短径28cm、床面からの深さ20cmを測り、小型円形である。P-11は長径48cm、短径48cm、床面からの深さ20cmを測り、大型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。P-12は長径30cm、短径26cm、床面からの深さ52cmを測り、中型不整形円形で底面に柱根状の掘り込みがある。P-13は長径48cm、短径38cm、床面からの深さ48cmを測り、大型不整形円形で底面に柱根状の掘り込みがある。P-14は長径30cm、短径30cm、床面からの深さ48cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。P-15は長径34cm、短径32cm、床面からの深さ14cmを測り、中型円形である。P-16は長径40cm、短径32cm、床面からの深さ33cmを測り、中型楕円形である。か跡は、掘り込みはごく浅いが中央やや東側付近から焼土が検出されたが、か跡として取り扱ってよいか疑問である。出土遺物は、古墳時代前期の土器破片が数点検出されたが、ごく小破片で図示し得るものはなかった。

(2) 古墳跡と出土遺物



第7图 古墳跡実測区及び遺物出土位置图



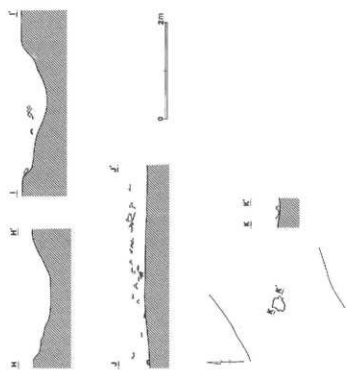
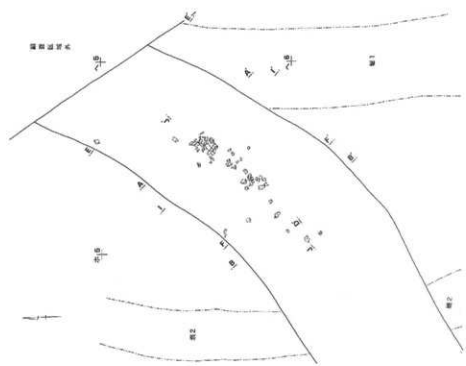
土層註

1. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を少量、黒褐色土粒子を多量、赤褐色土粒子をごく微量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 黒褐色土 黄褐色土粒子を微量含む。粘性、強。しまり、良。
3. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子をまばらに多量含む。粘性、強。しまり、良。
4. 暗灰褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック（30～50mm）を多量、灰褐色土粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、良。

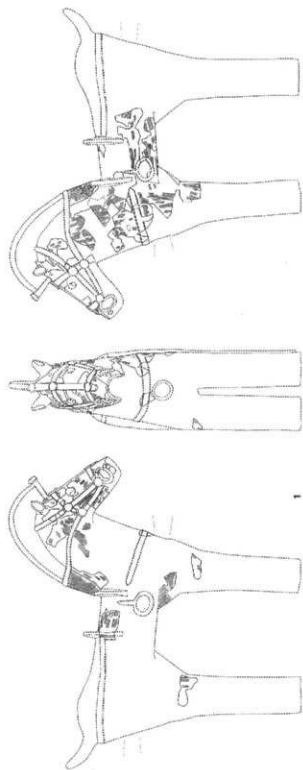
第8図 古墳跡土層断面図

古墳跡（第7図）

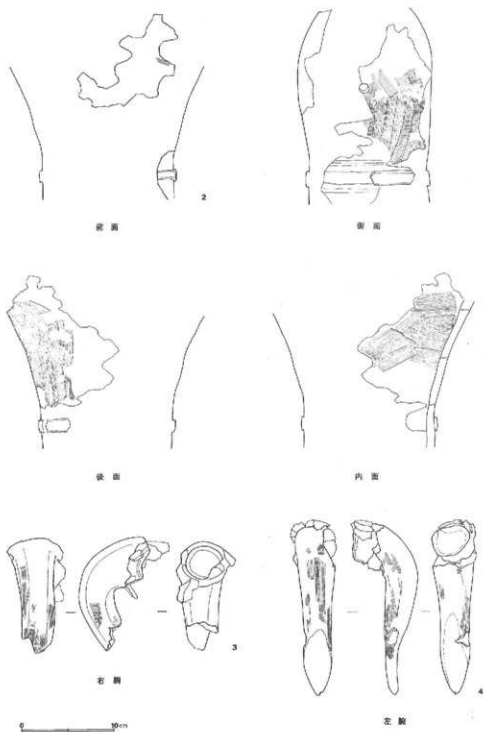
調査区の中央ハ－ホー4～7グリッドに位置する。東・西側ともに調査区域外となる。とくに、西側は近接する上戸田川の流路に流れ込むように構築されており、遺構確認面においては自然地形の傾斜とともに消えてしまうようである。検出された規模は、長さ14.0m、幅2.3～3.0m、遺構確認面からの深さ61.0cmを測る。軸偏差は、E-34°-Nとなる。他の遺構との切り合い関係は、第1・2・3号堀や第4号溝と直行するように構築されているが、いずれのものよりも本跡のほうが古い。掘り方は、堀りの中心に向かって緩やかに掘り込まれ、底面は若干の凹凸はあるものの平坦に近い。遺物は、東側付近の中・上位層からまとまって出土している。主な出土遺物としては、馬形埴輪（No.1）、人物埴輪の胴部（No.2）と腕部（No.3・4）、頭髮部の髷（No.5）、頸部の裝飾表現（No.6・7）、円筒埴輪（No.9～12）である。これらの遺物は、出土状況を見るかぎり北側から流入したものと判断することができ、調査時点では古墳跡としての盛土がなく元位置を探し求めることができなかった。



第9图 古墳跡遺物出土位置図



第10図 古墳跡出土遺物実測図（馬形車輪）



第11图 古墳跡出土遺物実測図(人物埴輪)



第12図 古墳跡出土遺物実測図

第1表 古墳跡出土遺物(1) (第10・11・12区)

番号	器種	大きさ	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	馬形埴輪	頭部 (34.5)	頭部及び鞍・たて髪・降泥・踵の一部が検出され、復元したものである。脚部及び臀部はすべて想定復元である。先ず、頭部は右側面が良好に残り目や耳(基部)が表現されている。頭部の製作並びに装着方法は、筒状に輪積みされた頭部に対して、扇状に重ねられた粘土板が被せるような形で装着されている。頭部には、割離した状態で出土したものであるが、円形の背や平板状の面繋、そして円形の辻金具が装着されていたようで接合して復元することができた。また、胴部の左側面には鞍と降泥が出土しており、粘土板の組み合わせの接着によって成形されている。さらに、降泥には楕円形の輪縁が鞍から下がる。たて髪は、頭部下端の一部が出土し、鞍との接着点が観察できた。なお、頭部の胸蓋及び降泥から後脚部にかけての尻髷には、垂下するような古来の割離した痕跡が見られる。頭部及び体部ともに、外面は細かい丁寧な斜方向のハケ整形を施している。残存は約20%、胴部のみ約40%。	胎土 H多 F微 A微 焼成 良好 色調 淡い橙褐色	
2	人物埴輪		人物埴輪の胴部破片。上部側面に腕(NO.3・4)が接合する。接着点は確認できるものの接合は難しい。腕の接着点下部には透かし孔がある。また、腰部にはベルトを表現する組状の粘土が付着する。外面は細かい縦方向の刷毛整形を施し、内面は粗い刷毛整形後ナデ調整を加える。残存、胴部のみ30%。	胎土 F少 H多 焼成 やや不良 色調 淡い橙褐色	
3	人物埴輪	長さ (12.4) 幅 3.5	人物埴輪の右腕部分。同一遺構内から出土している胴部の埴輪(NO.2)に装着されるものと思われる。腕の装着についてはソケット状に差し込むものであるが、基部は円形にまとめられている。腕の先端を欠損する。外面は細かい刷毛整形の後、ナデ調整が加えられる。残存、腕部のみ40%。	胎土 F少 H多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
4	人物埴輪	長さ 19.8 幅 3.3	人物埴輪の左腕部分。NO.3と同様に同一遺構内から出土している胴部の埴輪(NO.2)に装着されるものと思われる。腕の装着についてはソケット状に差し込むものであるが、基部は円形にまとめられており、接着に使われた粘土が剥がれ落ちている。また、腕の先端部分はへら状に平坦に作られている。指の表現はないが、側面に粘土が剥がれ落ちている部分があり親指が突起状に付けられていたのであろうか。外面は細かい刷毛整形の後、ナデ調整が加えられる。残存、腕部のみ90%。	胎土 F少 H多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	

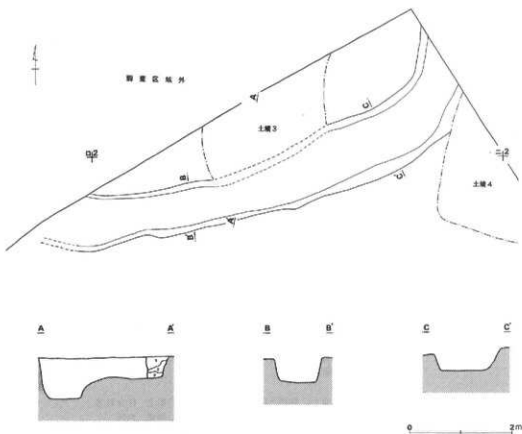
第2表 古墳跡出土遺物(2)

番号	器種	大きさ	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
5	人物埴輪		人物埴輪の頭部、眉の破片。裏面には、頭部との接着の痕跡がある。内外面ともに細かい刷毛整形後、丁寧なナデ調整を加える。	胎土 FH 多 焼成 良好 色調 濃い橙褐色	
6	人物埴輪		人物埴輪の頭部破片。透珠を付す。外面上部は顔部分に読くものと思われ、剥離した痕跡あり内外面ともにナデ調整。	胎土 D 微 FH 多 焼成 やや不良 色調 濃い橙褐色	
7	人物埴輪		人物埴輪の頭部破片。透珠を付す。外面は刷毛整形後、ナデ調整を加える。内面は粗い刷毛整形。	胎土 D 微 FH 多 焼成 良好 色調 濃い橙褐色	
8	形象埴輪		家形埴輪の屋根の部分であろうか。頂部は板状に粘土様を貼り付ける。外面は細かい刷毛整形後、ナデ調整を加える。内面は、細かい刷毛整形。	胎土 FH 多 焼成 良好 色調 濃い橙褐色	
9	円筒埴輪		円筒埴輪の胴部破片。外面には突帯があり、ヨコナデを施す。内面はナデ調整。	胎土 FH 多 焼成 やや不良 色調 濃い橙褐色	
10	円筒埴輪		円筒埴輪の口縁部破片。口縁端部は平周で微妙に凹状になる。外面は縦方向の刷毛整形。口縁端部は僅かにヨコナデを加える。内面は横方向の刷毛整形。	胎土 FH 多 焼成 良好 色調 濃い赤褐色	
11	円筒埴輪		円筒埴輪の口縁部。口縁端部は平坦である。外面は縦方向の刷毛整形。口縁端部はヨコナデを加える。内面は横方向の刷毛整形。	胎土 FH 多 焼成 良好 色調 濃い赤褐色	
12	円筒埴輪		円筒埴輪の胴部破片。下部に透かし孔の一部が確認できる。外面には突帯があり、ヨコナデが施される。胴部は縦方向の刷毛整形。内面は横方向の刷毛整形。	胎土 FH 多 焼成 良好 色調 濃い赤褐色	
13	甕	口径 (25.2) 胴径 (28.5)	頸部は短く外反し、胴部は球形になる。口縁部はヨコナデ調整、胴部は粗いナデ調整が施される。残存、30%。底部を欠損する。	胎土 D 少 H 多 焼成 良好 色調 淡い茶褐色	
14	台付甕	胴径 (10.0)	脚台部は「ハ」の字状に短く外反しながら開く。器壁は薄く、甕部の開きが強く立ち上がるようである。内面にはヘラナデ調整の痕跡あり。残存、脚台部のみ70%。	胎土 DFH 少 焼成 良好 色調 濃い茶褐色	

(3) 溝と出土遺物

第1号溝 (第13図)

調査区の北側ローハー1～2グリッドに位置する。西側及び東側が調査区域外となる。東西方向に構築されているが、東側では屈曲し北に向かうようである。検出された部分での規模は、長さ8.7m、幅0.9mから1.3m、遺構確認面から深さ50cmを測る。軸偏差は、E-17°-Nとなる。第3・4号土壌と切り合うが、本跡の方が古い。掘り方は浅く、底面は平坦である。遺物は、古墳時代前期の壺形土器 (No.1) や木葉痕を残す壺形土器 (No.2)、網目状然糸文が施文される壺形土器 (No.3) など僅かではあるが出土している。



土 層 註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を多量含む。粘性、弱。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック (30~50mm) を少量、灰褐色土粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 黒褐色土 黄褐色土粒子を少量、灰褐色土ブロック (30~50mm) を多量含む。粘性、良。しまり、良。

第13図 第1号溝実測図



第14図 第1号溝出土遺物実測図

第3表 第1号溝出土遺物（第14図）

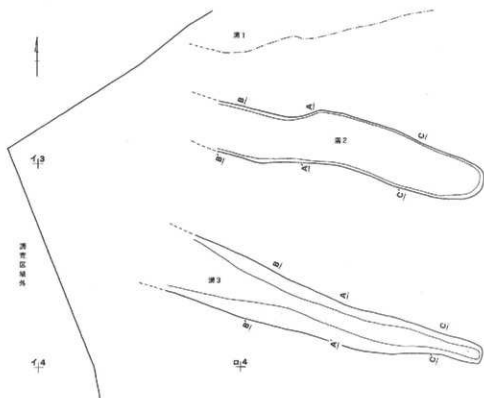
番号	器種	大きさ	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	小型壺	口径 (12.8)	鉢のような小型の広口壺型土器。内外面ともに器面の調整は粗い。外面はナデ調整。内部にはヘラナデ調整の痕跡あり。火熱を受けて外面は剥落が著しい。残存、30%。底部を欠損。	胎土 FG 多 H 微 焼成 やや不良 色調 鈍い褐色	
2	壺	底径 (7.6)	厚みのある壺形土器の底部破片。底面は平底となり木炭痕が残る。残存、底部のみ60%。	胎土 FH 多 焼成 良好 色調 鈍い橙褐色	
3	壺		肩部破片。丁寧な器面調整の後、網目状摺糸文を施す。	胎土 F 多 H 少 焼成 良好 色調 鈍い橙褐色	

第2号溝（第15図）

調査区の北側イ〜ハー2〜3グリッドに位置する。東西方向に構築されているが、掘り込みが浅いため西側の斜面に向い消滅して調査区域外となる。検出された部分での規模は、長さ5.5m、幅0.8m〜1.1m、遺構確認面から深さ15cmを測る。軸偏差は、E-15°-Nとなる。切り合う遺構は特にない。掘り方は浅く、底面は平坦である。遺物は、古墳時代前期の土器が僅かに出土しているが、図示し得るものはない。

第3号溝（第15図）

調査区の北側イ〜ハー3グリッドに位置する。第2号溝と並行するように東西方向に構築されているが、掘り込みが浅いため西側の斜面に向い消滅して調査区域外となる。検出された部分での規模は、長さ6.4m、幅0.4m〜1.2m、遺構確認面から深さ20〜46cmを測る。軸偏差は、E-18°-Nとなる。切り合う遺構は特にない。掘り方は浅く、底面は平坦である。遺物は、古墳時代前期の壺型土器（No. 1）や砥石（No. 2）が僅かに出土している。



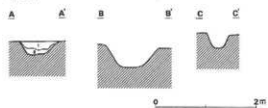
第2号溝



土層註(第2号溝)

1. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(50-100mm)を多量含む。焼土(3-5mm)が混じる。
粘性、弱。しまり、良。

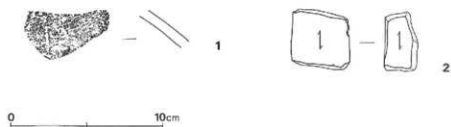
第3号溝



土層註(第3号溝)

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を少量、黄褐色土ブロック(30-100mm)を部分的に少量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック(50-100mm)を多量含む。粘性、良。しまり、良。

第15図 第2・3号溝実測図



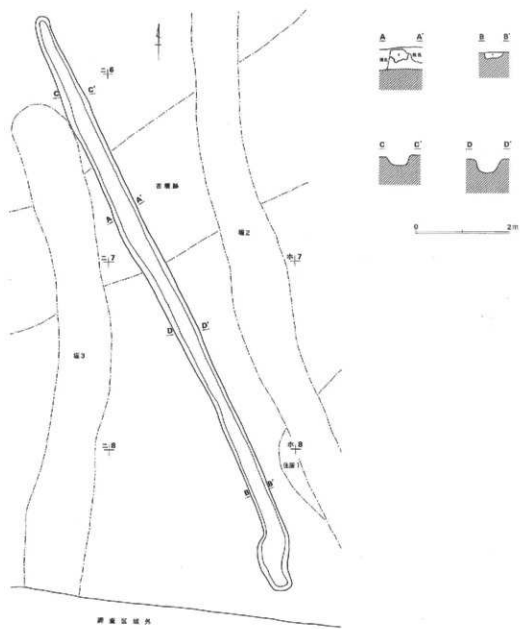
第16図 第3号溝出土遺物実測図

第4表 第3号溝出土遺物（第16図）

番号	器種	大きさ	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺		壺型土器の肩部破片。内外面ともに調整は不明瞭であるが、外面には網目状捺文を施す。外面のみ赤彩。	胎土 FG 多H少 焼成 やや不良 色調 暗い橙褐色	
2	砥石	幅 4.6 厚さ 1.8 重さ 51.0g	4面を研ぎ面とする。上・下部ともに欠損。火熱を受けた痕跡があり、赤褐色になっている。	石質 砂岩 色調 淡褐色	

第4号溝（第17図）

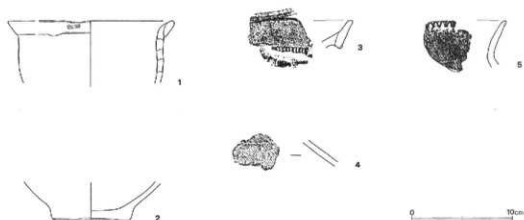
調査区の南側ハ～ニ5～8グリッドに位置する。南北方向に細長く直線的に構築されている。検出された部分での規模は、長さ13.3m、幅0.4m～0.7m、遺構確認面から深さ17～24cmを測る。軸偏差は、N-24°-Wとなる。調査区の中央部分で古墳跡の周溝と切り合うが、本跡の方が新しい。掘り込みは浅く、底面は平坦である。遺物は、古墳時代前期の壺型土器（No.1～4）や台付甕型土器（No.5）の小破片が僅かに出土している。



土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量、炭化物を少量含む、粘性、良。しまり、良。

第17図 第4号溝実測図



第18図 第4号溝出土遺物実測図

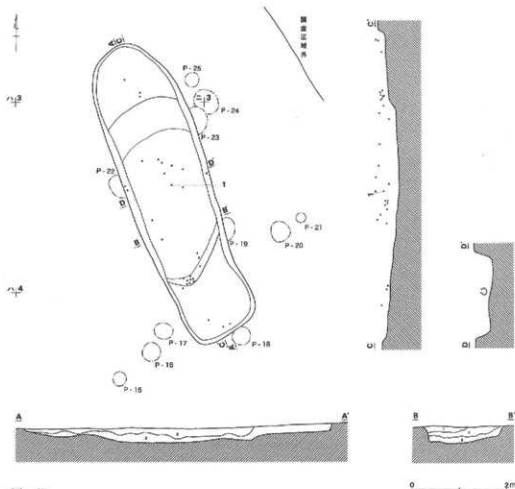
第5表 第4号溝出土遺物 (第18図)

番号	器種	大きさ	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	小型壺	口径 (16.6) 胴径 (14.4)	幅の狭い複合口縁の広口壺形土器。あるいは鉢形土器ともいえる。内外面ともに不明瞭であるが、横方向のヘラミガキ調整後、赤彩を施す。残存、10%。底部を欠損。	胎土 F 微 GH 少 焼成 良好 色調 淡い淡褐色	
2	小型壺	底径 (7.6)	壺形土器の底部破片。内外面ともに丁寧なヘラナデ調整を施す。底面を除き内外面ともに赤彩残存、底部のみ40%。	胎土 FG 多 H 少 焼成 良好 色調 鈍い淡褐色	
3	壺		複合口縁部破片。口縁部外面には羽状縄文が口唇部には縄文が施される。また、複合部下端には刻み目が施される。内外面ともに丁寧なナデ調整。縄文施文部を除き、赤彩。残存、口縁部のみ5%。	胎土 F 少 G 多 焼成 良好 色調 淡褐色	
4	壺		壺形土器の肩部破片。外面には不明瞭であるがS字状結節文が施され、下端に黒夷あり。内面は丁寧なナデ調整。	胎土 FG 少 焼成 良好 色調 淡褐色	
5	台付壺		緩やかに屈曲する口縁部破片。短く外反する。口縁端部には、木口状工具の刺突による刻目を施す。外面は刷毛整形の後、口縁部にナデ調整を加える。内面は横方向の刷毛整形。残存、口縁部のみ5%。	胎土 EFGH 少 焼成 良好 色調 淡褐色	

(4) 土壌と出土遺物

第1号土壌 (第19図)

調査区の中央ハ〜ニ-2〜4グリッドに位置する。本跡はとくに切り合う遺構はないが、P-19・22・23が壁面に接している。規模は、長さ6.5m、幅1.8m、深さ40cmを測り、南北に細長く掘られている。軸偏差は、N-20°-Wをとる。掘り方は、南側からは緩やかに、北側からは壁面をもって掘り込まれ、両側から約50cmのところまで段を持って深くなっている。底面は平坦であるが、一段深くなっている部分の長さは約150cmを測る。出土遺物は、古墳時代前期の壺型土器 (No1〜9) や台付壺型土器 (No10〜13) が覆土の中層部から出土している。

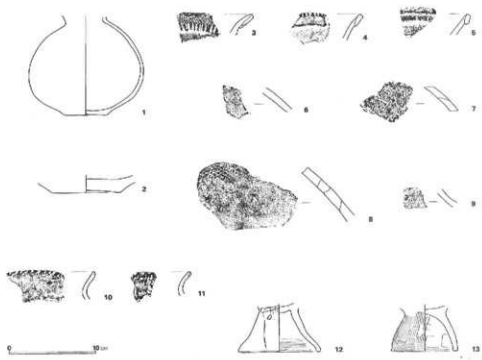


土層註

1. 明褐色土 黄褐色土粒子を微量、焼土をごく微量、炭化物を少量含む。粘性、良。しまり、良。
2. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック (50〜100mm) をまばらに多量、灰褐色土粒子を少量、焼土をごく微量、炭化物を少量含む。粘性、良。しまり、良。
3. 明褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック (30〜50mm) を多量、黒褐色土粒子を微量、焼土を微量含む。粘性、良。しまり、良。

第19図 第1号土壌実測図及び遺物出土位置図

44



第20図 第1号土壌出土遺物実測図

第6表 第1号土壌出土遺物(1) (第20図)

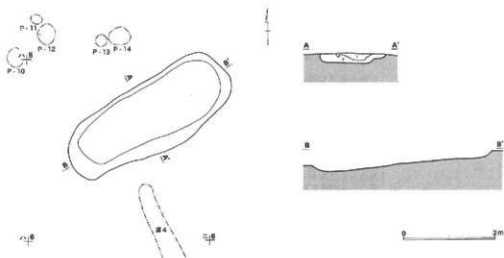
番号	器種	大きさ	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	胴径 4.7 胴径 14.5 底径 5.0	細く収縮する頸部。胴部は下半部で最大径になり、小さな平底となる。口縁部を欠損。胴部の外面には、剥落が著しく不明瞭であるが、丁寧なヘラミガキ調整が施されていたようである。残存、70%。口縁部を除き完存。	胎土 F 焼成 H 多 色調 濃い橙褐色	
2	壺	底径 4.0	平底となる底部破片。内外面ともに丁寧なナデ調整。底面を除き赤彩。内面には2次的な火熱を受けて煤けている。残存、底部のみ70%。	胎土 G 少 F 多 H 少 焼成 良好 色調 淡い淡褐色	
3	壺		複合口縁部小破片。複合部下端には大きめの刻み目。また、摩耗が著しく不明瞭であるが複合部及び口唇部には縄文が施される。	胎土 GH 少 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
4	壺		複合口縁部小破片。外面の口唇部に刻み目。内外面ともに摩耗が著しく調整等不明瞭であるが僅かに赤彩あり。	胎土 EF 少 焼成 やや不良 色調 灰橙褐色	
5	壺		幅の狭い複合口縁部小破片。外面の複合部を除き縦方向のヘラミガキ調整後、赤彩する。	胎土 GH 少 焼成 良好 色調 灰橙褐色	
6	壺		S字状結節文が施される壺形土器の肩部小破片。内外面ともに摩耗著しく調整等不明瞭。	胎土 H 多 焼成 やや不良 色調 淡い橙褐色	
7	壺		3段のS字状結節文が施される壺形土器の胴部小破片。棒状工具による沈線で縦溝状に文様帯を区画し、上下の沈線間を磨り滑す。外面は、文様帯を除き赤彩。内面は丁寧なナデ調整。	胎土 EGH 少 焼成 良好 色調 淡い橙褐色	

第7表 第1号土壌出土遺物(2)

番号	器種	大きさ	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
8	壺		網目状凹糸文を施す肩帯破片。細かい刷毛整形痕跡を残す。文様帯を除き赤彩あり。	胎土 F多 H少 焼成 良好 色調 淡い橙褐色	
9	壺	脚径 8.6	S字状筋節文が施される変形土器の肩帯小破片。点附文あり、外面を赤彩。	胎土 PGH少 焼成 良好 色調 淡い橙褐色	
10	台付壺	脚径 7.8	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は短く立ち上がる。口唇部には網目による刻みを施す。外面は縦方向、内面は横方向の刷毛整形を施す。	胎土 EPGH少 焼成 良好 色調 鈍い灰褐色	
11	台付壺		頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は短く立ち上がる。口唇部には網目によるやや深めの刻みを施す。外面は縦方向、内面は横方向の刷毛整形を施す。	胎土 F多 H少 焼成 良好 色調 淡褐色	
12	台付壺		接合部から僅かに傾斜をもって開き、裾部で内湾する。内外面ともにナデ調整。裾部に僅が付着する。残存、脚台部のみ70%。	胎土 FH少 焼成 良好 色調 淡い橙褐色	
13	台付壺		僅かに内湾しながら開く脚台部。外面は刷毛整形、内面は丁寧なコナデ調整。外面の接合部分に僅が付着する。脚台部のみ完存。	胎土 H多 焼成 良好 色調 橙褐色	

第2号土壌 (第21図)

調査区の中央ハニーニ5グリッドに位置する。調査区域西側の斜面に向かって構築されている。規模は、長さ4.0m、幅1.5m、深さ22.0cmであり、他の遺構とは切り合わない。軸偏差は、E-30°-Nとなる。掘り方は、遺構確認面から緩やかな傾斜をもって掘り込まれ、底面は平坦である。遺物は、古墳時代前期の土器小破片が僅かに出土しているが、図示し得るようなものはない。



土層註

1. 明灰褐色土 黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を多量含む。粘性、弱、しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック (10~50mm) を多量、赤褐色土粒子を微量含む。粘性、良、しまり、良。

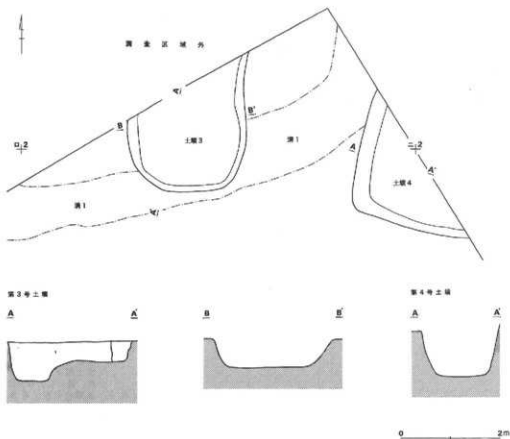
第21図 第2号土壌実測図

第3号土坑 (第22図)

調査区の北側ハ～ニ-1～2グリッドに位置する。調査区域の北側に構築され、調査区域外に及んでいる。検出された部分での規模は、長さ2.7m、幅2.4m、深さ57.0cmであり、第1号溝と僅かに切り合うが、本跡の方が新しい。軸偏差は、E-90°-Nとなる。掘り方は縦に掘り込まれ、底面は平坦である。遺物は、江戸時代後期以降の碗や皿、焙烙などが僅かに出土している。

第4号土坑 (第22図)

調査区の北東側ハ-1～2グリッドに位置する。調査区域の北東側に構築され、調査区域外に及んでいる。検出された部分での規模は、長さ2.6m、幅2.5m、深さ140.0cmであり、第1号溝と僅かに切り合うが、本跡の方が新しい。軸偏差は、E-76°-Nとなる。掘り方は縦に深く掘り込まれ、底面は平坦である。遺物は、江戸時代後期以降の灯明皿やすり鉢、砥石などが僅かに出土している。

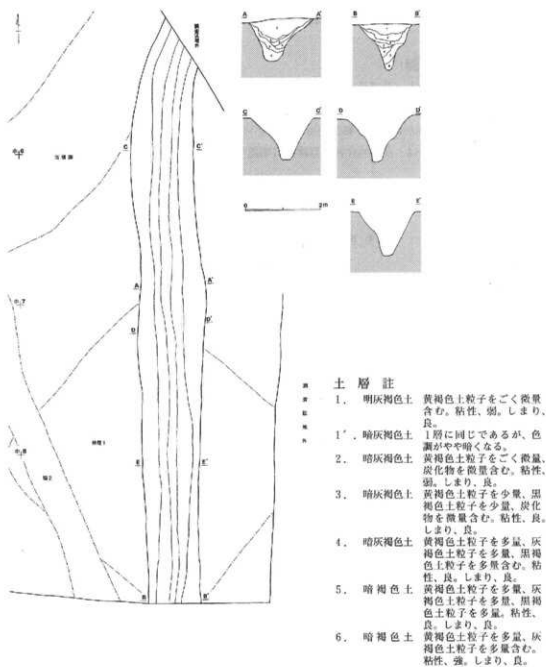


土層註

1. 黒褐色土 黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を多量含む。一度に埋め戻したようである。粘性、良。しまり良。

第22図 第3・4号土坑実測図

(5) 堀と出土遺物



第23図 第1号堀尖測図

第1号堀 (第23図)

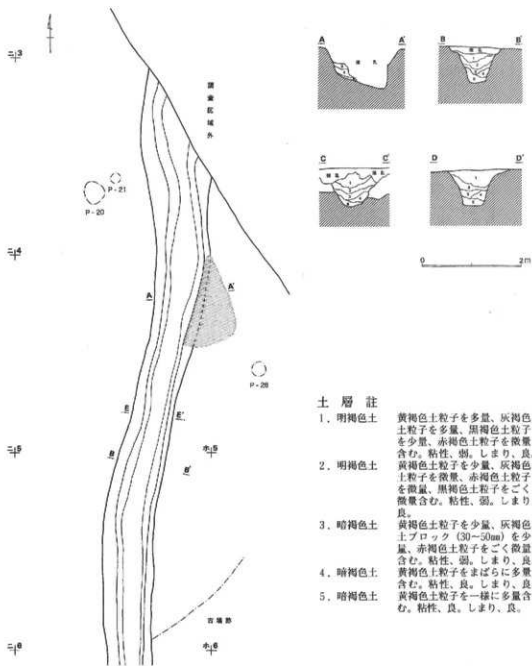
調査区の南側ホーヘー5~8グリッドに位置する。南北方向に長く直線的に構築されている。検出された部分での規模は、長さ15.3m、幅1.4m~1.8m、遺構確認面から深さ107~118cmを測る。軸偏差は、N-0°-Wとなる。調査区の中央やや東側部分で古墳跡の周溝と切り合うが、本跡の方が新しい。掘り込みは深く、底部が箱形になる葉研堀で、底面は平坦である。遺物は、中世の古瀬戸の甕 (No.1) や瀬戸美濃系の皿 (No.2)、常滑系の甕 (No.3)、砥石 (No.4) が僅かに出土している。



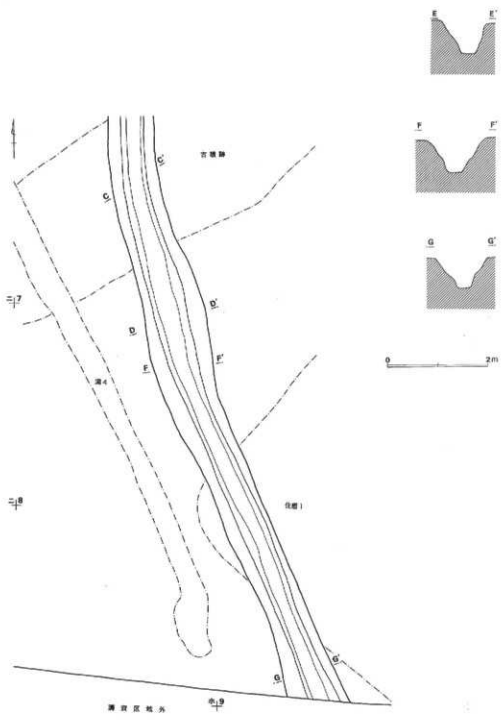
第24図 第1号堀出土遺物実測図

第8表 第1号堀出土遺物 (第24図)

番号	器種	大きさ	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕		古瀬戸。口縁部の破片。口縁直下にかえり状の突起をつくり出す。	胎土 F微 焼成 良好 (堅緻) 色調 淡灰褐色	
2	皿		瀬戸美濃系。おろし皿であろうか。皿の底部小破片。底部内面には鋭利な櫛歯状工具を使い斜格子状に摺り目を刻む。	胎土 F微 焼成 良好 (堅緻) 色調 灰褐色	
3	甕		常滑系。甕の胴部破片。胴部に格子状の押印あり。	胎土 F少且多 焼成 良好 (堅緻) 色調 鈍い茶褐色	
4	砥石	幅 3.7 厚さ 2.2 重さ 56.0g	4面と下端を合わせて5面を研ぎ面とする。手に持ったためかスタンプ状になっている。	石質 砂岩 色調 淡褐色	



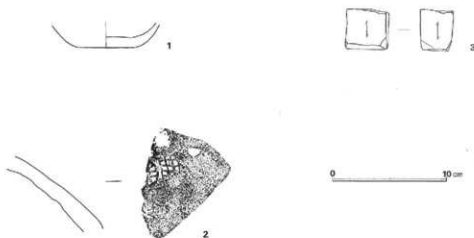
第25図 第2号堤尖測図(i)



第26图 第2号塌方测区(2)

第2号堀 (第25・26図)

調査区の南側ニールーホー3-8グリッドに位置する。南北方向に長く緩やかに湾曲して構築されている。南側・北側ともに調査区域外となる。検出された部分での規模は、長さ24.1m、幅0.8m-1.3m、遺構確認面から深さ56-79cmを測る。軸偏差は、N-7°-Wとなる。調査区の中央部分で古墳跡の周溝と切り合うが、本跡の方が新しい。掘り込みは深く底部が箱形になる葉研堀で、底面は平坦である。遺物は、中世のカワラケ (No.1)、常滑焼の甕 (No.2)、砥石 (No.3) が僅かに出土している。



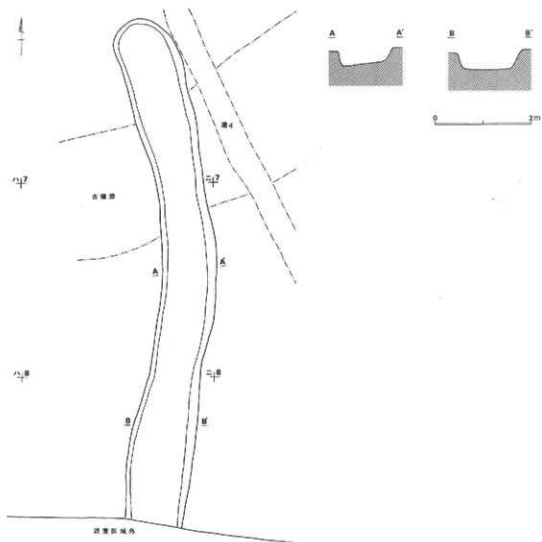
第27図 第2号堀出土遺物実測図

第9表 第2号堀出土遺物 (第27図)

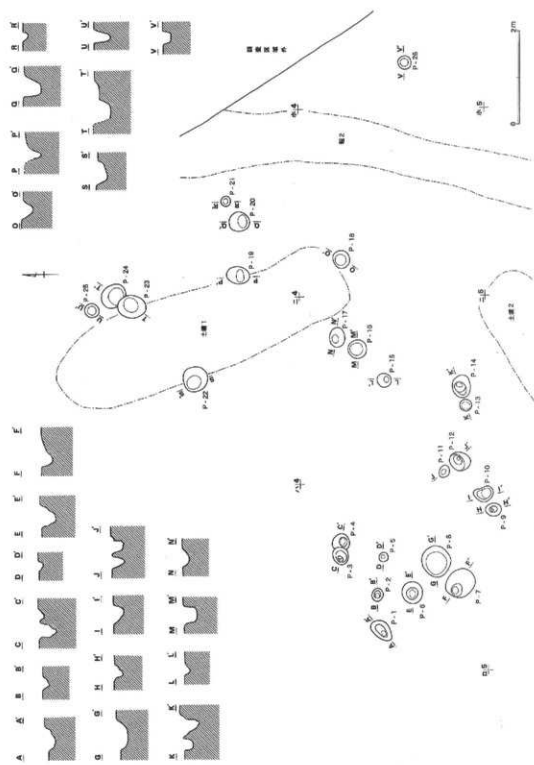
番号	器種	大きさ	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	皿		平底となるカワラケの底部破片。灯明皿として使用か、内面に油状の煤が多量に付着する。底部のみ完存。	胎土 FDG 少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
2	甕		常滑系。甕の胴肩部破片。肩部に格子状の押印あり。	胎土 FH 多 焼成 良好 (堅緻) 色調 濃い茶褐色	
3	砥石	幅 3.7 厚さ 2.2 重さ 76.5g	3面を研ぎ面とする。上部を欠損。火熱を受けた痕跡があり、やや赤褐色になっている。	石質 砂岩 色調 淡褐色	

第3号堀 (第28図)

調査区の南側ハ-6~8グリッドに位置する。南北方向に湾曲して構築されているが、南側が調査区域外となる。検出された部分での規模は、長さ10.4m、幅1.0m~1.4m、遺構確認面から深さ17~37cmを測る。軸偏差は、N-7°-Wとなる。調査区の中央部分で古墳跡の周溝と切り合うが、本跡の方が新しい。掘り込みは浅く、底面は平坦である。遺物は、検出されなかった。



第28図 第3号堀実測図



第29図 ビット実測図

(7) その他の遺構と出土遺物

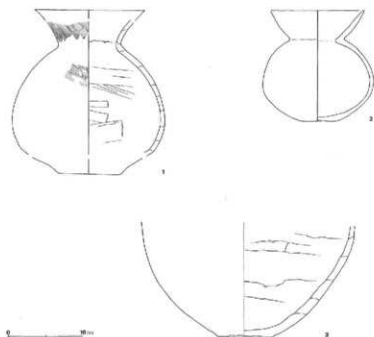
調査区の中央から北側部分にまとまってピット（第29図）を26ヶ所検出した。各ピットの形態や規模は、第1表に記したとおりである。

第10表 ピット一覧表（第29図）

単位：cm

番号	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	底面径	備考
1	ロー4	楕円形	52	34	23	凹状	柱痕あり
2	ロー4	円形	26	25	14	凹状	柱痕あり
3	ロー4	不整楕円形	36	30	38	凹状	柱痕あり
4	ロー4	不整楕円形	40	36	13	凹状	柱痕あり
5	ロー4	円形	20	19	11	フラット	
6	ロー4	円形	48	46	33	凹状	柱痕あり
7	ロー4	不整楕円形	64	56	24	凹状	柱痕あり
8	ロー4	不整楕円形	67	59	25	フラット	
9	ロー5	楕円形	35	25	20	凹状	
10	ロー4・5	不整楕円形	44	30	23	フラット	
11	ハー4	楕円形	27	20	28	フラット	
12	ハー4	楕円形	46	38	28	凹状	柱痕あり
13	ハー4	円形	27	26	20	フラット	
14	ハー4	楕円形	50	38	40	凹状	柱痕あり
15	ハー4	円形	30	30	12	フラット	
16	ハー4	円形	40	40	29	フラット	
17	ハー4	楕円形	42	32	13	フラット	
18	ニー4	円形	40	40	26	フラット	
19	ニー3	楕円形	50	38	37	フラット	
20	ニー3	円形	46	40	37	フラット	
21	ニー3	円形	20	20	11	フラット	
22	ハー3	円形	55	55	21	フラット	
23	ハー3	楕円形	62	50	38	フラット	
24	ハ・ニー2・3	楕円形	60	45	10	フラット	
25	ハー2	円形	32	30	35	フラット	
26	ホー4	円形	29	28	16	フラット	

(7) グリッド出土の遺物



第30図 グリッド出土の遺物実測図

第11表 グリッド出土の遺物 (第30図)

番号	器種	大きさ	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	頭径 (8.2) 胴径 (20.6)	胴部下半に最大径をもつ壺形土器。外面は頭部から胴部にかけて細かい刷毛整形後、丁寧なナデ調整が施される。内面はヘラナデ調整。残存、20%。口縁部及び底部を欠損。	胎土 日少 焼成 良好 色調 淡い橙褐色	
2	小型壺	口径 (12.6) 頭径 (7.4) 胴径 (10.0) 底径 4.6 器高 10.1	頭部からやや内湾するように開く口縁部。胴部は下反部に最大径をもつ。底部は僅かに凹状となる。器表面は厚減が著しく調整等不明瞭である。残存、50%。	胎土 且微 焼成 良好 色調 淡い橙褐色	
3	甕	胴径 (29.0) 底径 7.4	小さな底部。底部から立ち上がるように開く胴部。内外面ともに器面の調整は粗い。外面はヨコナデ調整、内面はヨコナデが施されるが輪襷み板を残す。残存、40%。胴上半部を欠損。	胎土 FH多 焼成 やや不良 色調 純い橙褐色	

6 ま と め

上戸田本村遺跡は、自然堤防上に立地する遺跡群の中ほどに位置する。北側には弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓群として知られる鎧冶谷・新田口遺跡があり、南側には、古墳時代後期の人物埴輪を出土した古墳群を形成する南原遺跡がある。このような位置にあって上戸田本村遺跡は、古くから直刀二振りを出土する古墳跡「くまん塚」の存在が知られていた。これまでの第1～3次調査では、弥生時代後期の環壕と思われる溝跡や、古墳時代前期の住居跡、古墳時代後期のカマドを有する住居跡が検出されていた。今回の第4次調査地点は、今まで開墾されて原形をとどめていなかった古墳跡「くまん塚」の一部にあたる位置を調査したと考えられ、不明確であった古墳跡の規模や埴輪が一部ではあるが出土し、その様相が明らかになってきたように思われる。ここでは、上戸田本村遺跡第4次調査の成果として出土した形象埴輪についてまとめておきたい。

◇第4次調査において出土した形象埴輪について

埴輪を出土した古墳跡は、上戸田本村遺跡が所在する微高地の西側の縁辺部に立地し、西側を流れる上戸田川に向けて埴が途切れるように構築されていた。

今回出土した主な形象埴輪には、人物埴輪と馬形埴輪がある。発掘調査中においては、人物埴輪の腕の部分が調査の初期段階から出土しており、溝状の遺構から「埴輪」の存在が示唆されてきていた。調査を進めるにあたって埴輪が形態を留めない状態で検出されていたため出土地点を詳細に記録し、出土品の整理段階での復元を余儀なくされた。

まず、人物埴輪は首飾りの装飾を付した胴部と両腕が出土している。いずれも、破片の状態であるが接合し、胴部と腕部はソケット状に差し込まれる接点がある。

腕部は、左腕・右腕とも胴部（胸）の前に出して出るように装着されるようである頭部並びに胴下半部が検出されていないため不明な点が多いが腰部にベルト状の表現がある。全体が検出されていないのが残念である。

次に、馬形埴輪は各部位が破損あるいは剥離して出土したため調査中は出土状況が不明瞭である。出土品の接合作業など整理が進む段階で形状や大きさなどが分かってきたものである。出土した部位の残存率は少なく約20%程度のものであるが、頭部や蹄泥の大きさから体部全体の大きさを推定し復元作業を行った。この馬形埴輪の製作上の特徴は、頭部が板状に整形されたものを折り曲げて製作されており、円筒状に積み上げられた頭部に被せるものであろう。下顎や鼻さきの表現が省略されている。馬具の轡の表現が簡略化されており、辻金具も扁平な円形のものとなっている。また、胸繫や尻繫には、垂飾されていた杏葉の剥離した円形の痕跡があり、不明瞭ではあるが興味深いところである。

では、このような形象埴輪がどこから上戸田本村遺跡に運び込まれたのであろうか。胎土分析など行っていないため詳細なことは不明であるが、型的には6世紀後半から末葉にあたるものであろう。形態的には、生出土埴輪窯跡、あるいはさきたま古墳群周辺の窯跡の可能性が高い。この上戸田本村遺跡の南側に隣接する南原遺跡から出土している6世紀中頃に位置づけられる人物埴輪頭部や円筒埴輪などは生出土埴輪窯跡出土のものに類似している。両遺跡とも荒川（旧入間川）の流路に面してい

る、あるいは若干内陸に入る位置にあることから埴輪の流通ルートを考えると、生田塚埴輪窯跡で生産されたものが元荒川を下り、現在の荒川に沿ってさかのぼり運び込まれた可能性が考えられる。なお、今後において埴輪の胎土分析等を行い、生田塚埴輪窯跡など埴輪製作跡との関係を考慮して行きたい。

[参考文献]

増田逸朗・山崎 武：1981 『生田塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会報告書第2集
鴻巣市遺跡調査会

山崎 武：1987 『鴻巣市遺跡群Ⅲ 生田塚遺跡 (D・E地点) —遺構・遺物編—』
鴻巣市文化財調査報告書第3集 鴻巣市教育委員会

山崎 武：1994 『鴻巣市遺跡群Ⅲ 生田塚遺跡 (D・E地点) —本文・写真図版編—』鴻巣市文化
財調査報告書第3集 鴻巣市教育委員会

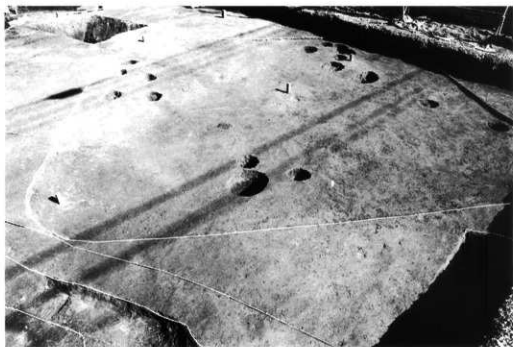


(1) 上戸田本村遺跡Ⅳの位置 ○調査地



(2) 調査区域全景

図版 2



(1) 第1号住居跡(南から)



(2) 古墳跡(東から)

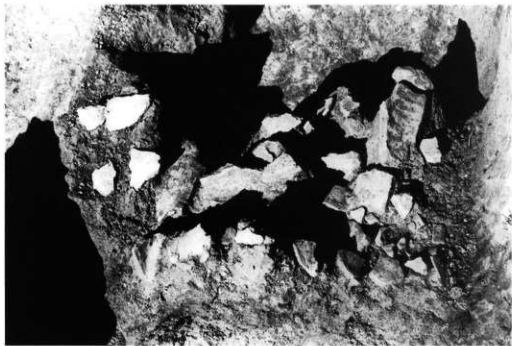


(1) 古墳跡土层断面 (SPA)



(2) 古墳跡埴輪片出土状態

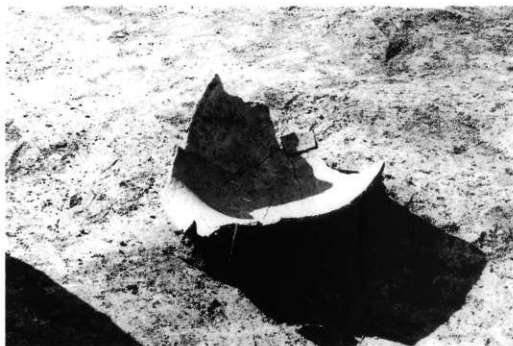
图版 4



(1) 古埴跡埴輪片出土狀態



(2) 古埴跡埴輪片出土狀態



(1) 古墳跡土器出土状態



(2) 古墳跡調査風景

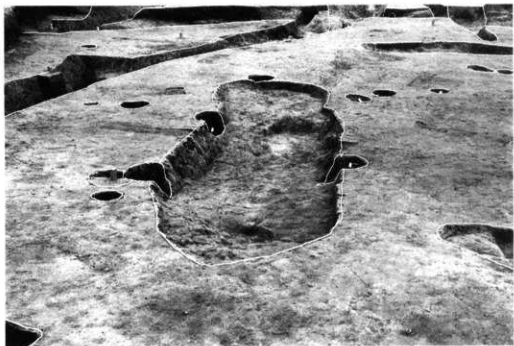
図版 6



(1) 第1・2・3号溝 (西から)



(2) 第4号溝 (南から)

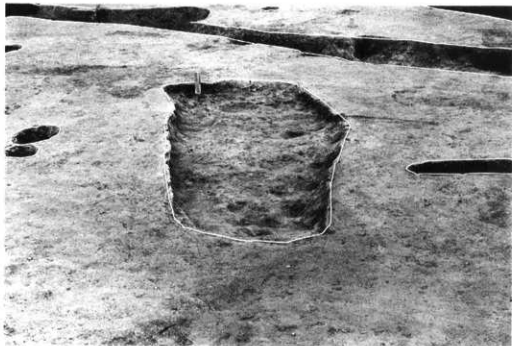


(1) 第1号土壇(北から)



(2) 第1号土壇土器出土状態

図版 8



(1) 第2号土坑（西から）



(2) 第1号堀（北から）



(1) 第2号堀 (南から)



(2) 第2号堀 (南から)

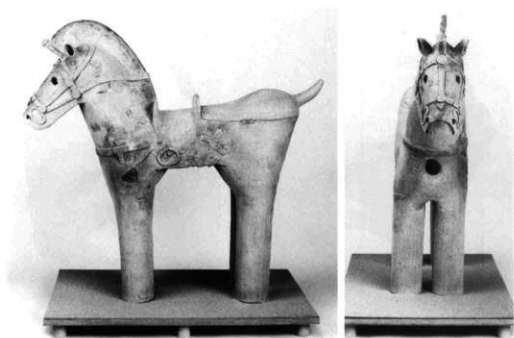
図版 10



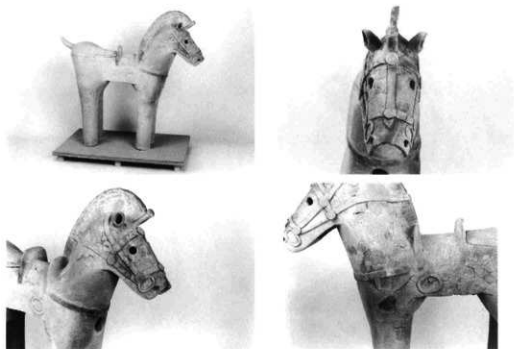
(1) 第3号堀 (南から)



(2) ビット群



(1) 古墳跡出土遺物馬形埴輪



(2) 古墳跡出土遺物馬形埴輪

图版 12



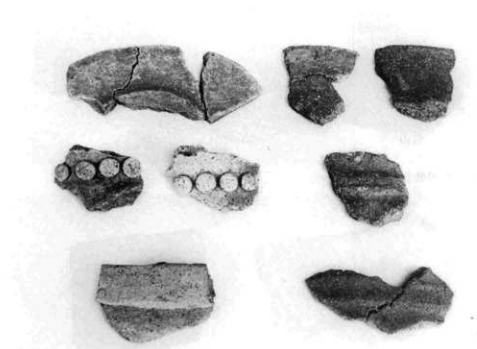
(1) 古墳跡出土遺物人物埴輪



(2) 古墳跡出土遺物人物埴輪右腕



(3) 古墳跡出土遺物人物埴輪左腕



(1) 古墳跡出土遺物埴輪片



(2) 古墳跡出土遺物土器

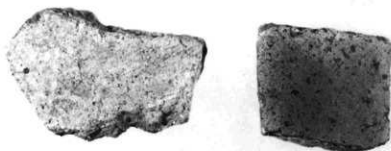


(3) 古墳跡出土遺物土器

图版 14



(1) 第1号沟出土遗物



(2) 第3号沟出土遗物



(3) 第4号沟出土遗物



(1) 第1号土坑出土遗物



(2) 第1号土坑出土遗物

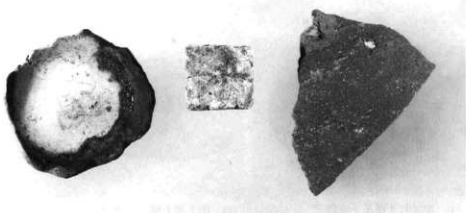


(3) 第3号土坑出土遗物



(4) 第1号土坑出土遗物

図版 16



(1) 第2号堀出土遺物



(2) グリッド出土遺物



(3) グリッド出土遺物



(4) グリッド出土遺物



(5) グリッド出土遺物

報 告 書 抄 録

フリガナ	カミトダホンムライセキ							
書 名	上戸田本村遺跡Ⅳ (第4次)							
副 書 名						巻 次		
シ リ ー ズ	戸田市遺跡調査会報告書					巻 次	第9集	
編 著 者	小 島 清 一							
編 集 機 関	戸田市遺跡調査会							
所 在 地	〒335-8588 戸田市上戸田1-18-1 TEL. 048-441-1800							
発 行 日	2004 (平成16年) 3月18日							
フリガナ	フリガナ	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所 在 地	市町村	遺跡	(°'")	(°'")		(㎡)	
カミトダホンムラ 上戸田本村 遺 跡 (第4次)	トダホンムラ 戸田市本町	11224	006	35°48'18"	139°40'29"	平成11年 10月18日 } 平成11年 12月7日	1,400.86	共同住宅建設
所収遺跡	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
上戸田本村 遺 跡 (第4次)	集落	古墳時代～ 近世	住居跡	1軒	土器			
			古墳跡	1基	馬形埴輪・人物埴			
			溝跡	4本	輪			
			土壇	4基	土器			
			堀跡	3本	陶器			

上戸田本村遺跡Ⅳ

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第9集

発行日 平成16年3月18日

発行 戸田市遺跡調査会
戸田市上戸田1-18-1
戸田市教育委員会内

印刷 関東図書株式会社
さいたま市南区別所3-1-10